

# 山と博物館

第 6 卷 第 5 号

1961年4月25日



## にわとり

白馬岳の北、乗鞍岳の直下に毎年みごとな「にわとり?」が現われる。ちょうど苗代に種をまく季節である。爺ガ岳、鹿島槍、白馬岳では黒い岩肌がそれぞれ「爺さん」「つる」「しし」「代掻き馬」を形づくるが、このにわたりの場合は異なり、残雪の形が周囲の黒い岩肌に浮き彫りされたようにくつきりと現われる。

大町山岳博物館

## 大町の

## カモシカの保護から飼育まで

千葉 彬 司

## はじめに

北アルプスの高山性動物カモシカは年々密猟によってその数を減じ、登山者のシリ皮にこそなれ、山においても生きたその姿にふれることはほとんど稀といっても良かった。

たまたま昭和30年の大雪によって餌を求めて山麓に下った一体の幼体を保護することができ、一般市民、登山者に観察できるように本館で飼育している。本館としてもカモシカの飼育ははじめてであり、文献によっても余り詳しいことは載っていない。私達の独自の方法によって人工餌に餌づかせたのでその経過をのべ、一片の参考にしていただけたら幸いと思う。

## 保護から餌づけ

本館では現在2頭のカモシカを飼育している。岳子(♀6才)房子(♀6才位)の2頭で岳子が保護されたのは昭和30年2月2日である。その年は例年になく雪が多く降り高山帯にすむカモシカも食糧難?に見舞われたらしく、餌を求めて山麓に下った。2日の午前9時頃、南安曇郡安曇村稲核の郵便局長が裏庭でしきりにツバキの葉を食べている動物を発見して博物館に連絡した。

岳子は稲核から自動車であちちに本館に輸送された、館庭には以前からカモシカ用の小舎が建てられてありさっそくそれに収容された。

最初に頭をいためたのは餌付けの問題であった。関係方面に問い合わせるにしてもその間餌を与えない訳には

いれない。稲核で食べていたツバキを少量もらい受けて運んであったのでそれを与えるとよく食べたのでとりあえず大町市の花屋からツバキを購入して餌とした。しかし年中ツバキを購入して与えるという事は困難で、花屋のツバキもたちまち品切れとなってしまった。ツバキを与えて3日間、なかなか良好なのでツバキの枝にませて館庭にたくさんあったマサ

キ(ニシキギ科)を与たが相変らず良く食べた。

それからリンゴのウス切り、サツマイモのウス切りとをませて与え、一週間後にはリンゴ、サツマイモ、野菜(白菜、キャベツ、雑草)木の小枝に切り替えられた。

房子が飼われていたのは燕岳へ登る途中の中房温泉で昭和33年8月13日こちらにまわしてもらったものである。本館に来た時にはすでに餌になれていたため餌付けをする必要はなかった。

## 飼料について

リンゴ、サツマイモ等の飼料に切りかえて間もなく、オカラ(豆腐カス)、コヌカ、リンゴ、サツマイモ、コロイカル、干魚の粉末、野菜の千切りの混合の餌が与えられたが、一週間としないうちに腹がふくれ、胃腸障害を起してしまった。獣医(本館の野性動物の治療はほとんど故丸山獣医が受け持ってくれた)によれば、急性胃腸カタルであると診断され、静脈注射(ブドウ糖20プロ20ccアンナカ20プロ2ccビタミンB10%2cc混合液)皮下注射(エルエックス5cc)が行なわれ、餌には(クレオリン20cc、リウサンマグネシヤ30gクミチンキ10cc)の粉末剤を混ぜて与えた、一週間ほど続けると殆んど治ってしまった。飼料表からオカラ、コヌカは除かれた。

その後も毎朝、糞には気を配り、ちょっとした変化にも神経を尖らせた。

元来カモシカの高山で食べているものは猟師によると



園内を遊びまわる「岳子」 1960. 8

ガンベ(オオカメノキ、ミヤマ  
ガマズミなど)の葉や小枝の先  
より10~15%位のところまで好  
んで食べ雪の深い時にはサルオ  
ガセの類まで食べているとのこ  
とである。

猟師はいままでの経験からい  
ってやわらかい草はほとんど敬  
遠されて余り食べていず、ササ  
(クマイザサ、チシマザサ)系  
統をたくさん食べていることも  
あるという。

彼等の胃腸にはセンイ分が重  
要な役目を果たしているのでは  
ないかと思われる。

### 夏・冬の管理

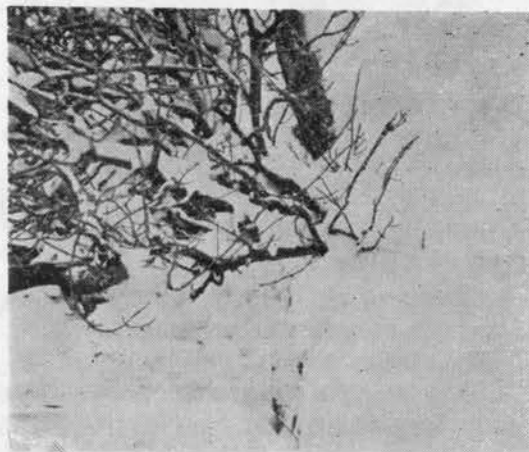
高山性動物であるため冬の寒  
さについては余り心配しなかつ  
たが、生後約9カ月位の幼体で  
あるために大事をとって冬季に

は金網の面にワラムシロが二重にはられた、昼間はまき  
上げられ夕刻には再び下ろされ、幾分でも寒気をさえぎ  
り又、ねむる場所にもムシロがしかれ居住性の良いもの  
にした。

特に気を配ったのは夏季の管理であった。高山に棲ん  
でいる場合、ほぼ1100m以上(例外もある)にすんでお  
り、低地に下る場合は水に入る時位のものであるので、  
この低地(動物舎720m)ではたして過ごせるかと心配し  
た。飼育舎の金網には冬のムシロに代ってヨシズが張ら  
れ、水溜には満々と水が張られ、常時水道の水がしぶきを  
上げ、より飼育舎の中の温度を下げるように努力された

### 健康について

胃腸障害を起したのは1度、オカラ、コヌカが原因で



こんなにツバキの葉が食べられていた 1955.2



保護された当時の岳子

1955.2 1956.2

あったが、運動不足が更にそれを助長していたようである。

高山帯での行動範囲に比べると3.6m×3.6mの飼育舎  
では、運動どころか歩き廻るのがせ一杯であるので、一  
週間に3回は園内に出し自由に走りまわらせた、運動中  
には園内から飛び出さないように、又危害を加える犬な  
どは入れないように心がけた。

園内のバーゴラ・ガーデンに浅い池があったのでしば  
しば中に入って水煙を上げ、付近の川の中へ腹の辺まで  
水につかってはなまわった、それから6年、当時はこれ  
が角かなと判断しなければわからない位だったのが立派  
な角になり、体も力も大きくなった、ただ変わらないの  
は館員を恐れないで鼻をすりつけてくるところである。

### おわりに

県下でひんびんに行なわれていたカモシカの密猟が一  
斉に取り締られ、密猟が減じつつあるのは喜しいこと  
である。

又各関係方面では保護増殖の研究の面に力が入られ、  
天然記念物カモシカが動物園で繁殖するのも遠いこと  
ではないと確信する。

(山博学芸員補)

給餌料	
一回分	(1日2回給餌午前10時 午後5時)
リンゴ	365g
野菜	1460g
サツマイモ	365g
コロイカル	4g

36年

## カモシカ保存学術研究会の計画

—誕生から今後の実施計画—

角田 保

「にほんかもしか」が昭和9年5月1日天然記念物に指定された我が国として外国に誇り得る貴重な動物でありながらその研究論文は僅々たるものであるそれに勝たずにはぜひカモシカの毛皮でなければ駄目だという事から密猟が各県でおこなわれ特に三重県、岡山県、長野県では新聞ザタにとりあげられ県民として恥かしい次第であった。獲るなどするのでは当抵駄目だと考えその人工繁殖をと智恵をしぼりそこで、悪を善に切り換える事ができればと思い、今日まで殆んど研究されていなかった「かもしか」の生態研究を行うと共に、その繁殖をはかりたいので、鈴鹿山系かもしか保存学術研究会を組織し、文部省文化財保護委員会並びに林野庁に許可申請を提出したところ、昭和35年11月29日付で、現状変更(捕獲および飼育)の許可が下りた。

飼育場所は、三重郡菟野町湯之山御在所ヶ岳頂上(標高1210米)に撰定した。理由は、三重交通株式会社が御在所ヶ岳ロープウエーKKを作り、開発にのり出している機会に、特徴のある施設をとの希望で「かもしか」をとりあげ、双方で歩み寄った。

飼育舎、遊び場の気象は1年の50%が晴、28%が曇、僅かに14%が雨で、雪の日は多くて7%(23日)であり2月に零下20°Cになる。ロープウエーが建設される前はかもしかの棲息場所であったし、彼等のすみかを変えさせ、追いつめるのも可愛想だとの観点からその繁殖も可能だとの獣師、動物学者、植物学者等の度重なる会合で到達したのである。

さて、飼育繁殖をはかるとなると、飼育舎、遊び場、病氣治療等過去のデーターを詳しく取める必要があるのだ、現在「かもしか」を飼育している処、飼育した経験のあるところを訪ねてあるいた。

その結果をまとめよう。

## ◇東京都恩賜上野動物園

この動物園が、一番数多くあつかつており何年にどの県より入園させ、その死因を述べよう。

昭和21年	富山県より3匹、	抗食、夏死亡
	生在日数7日、23日、30日、	
昭昭24年5月4日	長野県 ♀	34年3月死亡、9年10ヶ月、
昭和24年	長野県 ♀	抗食 生存日数2日
昭和24年12月6日	長野県 ♂	急性肺炎、若く生存日数226日(蚊、ハエが多くBHC散布のため)
昭和25年3月13日	三重県 ♀	栄養不良、仔を産む生存日数197日
昭和25年3月	富山県 ♂	5月出産11日生存、

昭和25年	三重県 ♀	抗食、♀10月死亡、肺炎、生存日数170日
昭和25年3月と4月	三重県 ♂と♀	♀3月のは1日、4月のは8日生存、抗食、
昭和25年6月	青森県 ♂	抗食、12日生存、
昭和26年	岩手県 ♂	斗争し肺骨折、若く38日生存、
昭和28年5月	三重県 ♂	腹内出血、5日生存
昭和27年6月	三重県 ♀	「 20日生存、
昭和28年11月	長野県 ♂	内心膜炎、186日生存
昭和28年6月	長野県 ♀	肺炎、155日生存、
昭和28年10月	長野県 ♀	剣傷腹膜炎、60日生存
昭和32年6月	長野県 ♂	カタル性腸炎、35日生存
昭和32年10月	茨城県 ♂	心筋炎、クル病、若35日生存
昭和33年7月	長野県 ♂	肺炎17号台風の影響45日生存
昭和35年2月	宮城県 ♀	現在生存中

以上をながめてみて、一年生存した例はなく、しかも大部分早死している。唯、昭和24年5月に長野県から入園した雌が9年10ヶ月生存しているのが目立つのみ又三重県大台ヶ原から入園した昭和25年8月の雌が仔を産みおとしている特殊な例がみられる。

昭和35年2月に宮城県で犬に右触角をかみとられた「かもしか」を2月25日に見たが昼間餌は食べずに夜の間に全部食べてしまうとのことだった。一日一回の分量は人参500g、甘藷500g、リンゴ500g(3個)、フスマ200g、ルサン粉末100g、エンバイ200g、ハクサイ500gである。

## ◇多摩自然動物園

こゝが自然動物園という名のごとく2千坪位のところに飼育しており、午前中1回餌を与えている。甘藷1kg、人参1.5kg、オカラ500g、リンゴ300g、リュウサン粉50g、パン2個、鈉塩であった。この園の渋谷飼育係長より多大の助言を頂いた。

## ◇大阪天王寺動物園

この園が一番飼育日数が長く、昭和25年2月から34年4月までの10年2ヶ月の生存日数がある。大塚山で捕獲した個体で、飼育舎は、小さいものだった。リンゴ30匁、パン2分の1個、青菜100匁、人参50匁で朝オカラ300匁、馬鈴薯100匁、コロイカル1.5匁、塩1.5匁で朝夕2回与えていた。しかし、カルシウム不足のため、自分の毛を食べ胃の中で毛球が5つつき腸に入

って排出しなかったのが死因である。普通は糞と一緒に  
出るものである。(体をなめる動物にはよくある。)

#### ◇京都市記念動物園

昭和30年3月1日入園の雌が30年5月20日に死亡して  
いるが仔を産み人工保育して3~4ヶ月生きさせてい  
るが下痢して肛門にハエが集り、体内にウジが入り直  
腸癌で死んでいる。又昭和30年2月1日に入園したの  
が31年7月死亡しているのは下痢である。現在1匹生  
存していたのは、昭和35年3月17日滋賀県甲賀郡土山  
町で生後1年位の雄を捕獲したもので朝(9時)と夕  
(3時)に餌を与えていた。人参500g ジャガイモ700  
g、フスマ少々であった。

#### ◇大町山岳博物館

山と博物館に詳細に掲示されていた1956年1月29日  
生後約9ヶ月の雌が里にでてきたのを捕獲したもので  
それが現在非常によく慣れて、2間四方の園舎に飼育  
されていた。もう一匹、58年8月13日に気の荒い雌が  
入園している。

大町のみが、三重県と同じく「かもしか」の生息に適  
した場所なのである。1月-30、2月-2.5、3月1.7、  
4月8.6、5月13.8、6月18.3、7月21.9、8月23.3、  
9月18.9、10月12.1、11月6.3、12月0.6、で最高27.8度  
である。

これら各園からの状況から判断するに、「かもしか」  
を飼育する上に高温と共に大きな障碍は、客からの投餌  
である。したがって餌付けに成功して間もないものを急  
に客の多いところに出す事は危険である。捕獲時期は3  
月、4月が一番良く、雌は仔をもち夏までに人工飼育に  
慣れ、夏をこせば生育し易いわけである。

「かもしか」の餌付けの実験例は、京都動物園の池田  
哲朗氏が、かしの葉ささの葉人参、馬鈴薯、乾草、ふす  
まを使い、朝夕2回に分けて与え、三日目に、かしの葉  
とささの葉を食べ初め、6日目に馬鈴薯(2kg)と乾草(2  
00g)を食べ、ふすまは11日目にやっとならせたのみ  
で、特に人参を好む。三重県の飼育には雌雄四頭捕獲し  
雌雄別々に入れ、発情期に一緒にする計画である。

#### 第一回捕獲状況

- 1、日時、4月14~15日
- 2、場所、員弁郡石加村竜ヶ岳東麓
- 3、勢子、犬を使うわけで、犬が勢子の役目

勢子長に松岡覚氏があたり、松岡氏の飼育している犬を  
使った。太郎(5才)黒(5才)銀(12才)チビ(3才)と、矢  
田性市、小林貢、松岡渡、市川藤次郎、館修、氏の6人  
の猟師が当たった。かもしかの生活圏は狭く、犬に追われ  
ても鹿だと遠くに走り去り犬がとられるが、かもしかは  
すぐに戻ってくる性質があり、人間が近かすくと岩の上  
に立ち、こちらをデットみつめている。200近づき犬を  
離すと、チビが一番よく追う。しかし1000米後を、「か  
もしか」の蹄の間から出す臭をかいでワン、ワンと鳴い  
て走るのである。但し鳴くのは、姿を見たときと自分が  
ガケをとべない時である。途中で、2匹「かもしか」を

をぎ出したので、犬はどれを追ってよいか一時まよった  
が最初出た大きな雄を追って、2時間後にガレに追いつ  
めた。追いつめると犬は主人の来るまで吠えどおしであ  
る(「かもしか」は犬に追われるとシャーシャーシャー  
と鳴き乍ら走り去る。)

やっとならぶと、気の強いチビがとびつくだかもし  
か、触角を下げ前肢で地面をたつき(ヒズメを開き)  
威かくする。遂に犬がとびつきたが「かもしか」の角に  
ひかけられ、五米下の岩場にたたきおとされた。松岡勢  
子長は上部からワナをかけようと準備している時で筆者  
はその両方を真横から眺めていた。松岡氏は、下にNH  
Kのテレビの方に、「おい、そこに、ほやっとならぶとい  
るの、犬は死んだかどうかみよ」とどなった。幸い下は  
砂地の処に落ち九死に一生を得て助かった。それから他  
の犬をしり猟師のみで囲みワナをかけようとする。そ  
の間でも「かもしか」は前の枝葉を食べ平然としている  
のにはいささか驚いた。ワナをかけても、葉を食べるそ  
うである。この習性などは一寸考えられなかった。タテ  
ガミを立て威かくする姿はまさに山の牛という感じを受  
けた。そのうちに「かもしか」はその崖をとび、自分の肢  
でひっかけた石が背中におちてきて内出血のため特別天  
然記念物は死んでしまった筆者がおちるとすぐかけつけ  
たら眼の水晶体は青色に変わりつゝあった。途中、溪谷で  
腹を開き内臓物を出す。胃袋の中には、アスナロ、ジャ  
シャンボ、イヌツゲの小枝、葉が沢山未消化のまゝであ  
った。この様子だと、追いつめる崖の状態がよほどよく  
なければ生捕は困難だと思った。名古屋動物園でマスイ  
銃をかりてでも捕獲を急がねばと思った。

毛先の白いのは老で、黒いのは幼体である。猟師は触  
角をけすってハシカの葉に利用している話も聞く。  
三重県鈴鹿山系の「かもしか」の毛色は、茶色が一番多  
く、次に黒色で、灰色が一番少い様である。触角も約20  
種のが最高で、シワの距離も個体により差異があるもの  
の様である。青森県の個体は背高が高く、87種になり、  
南下するにしたがい60~65種と体が小さくなる傾向がみ  
られる。高山性の動物であるかもしかが動物園で生育困  
難なのは、千米以上の山から低地に下す時、気圧、気温  
の関係で徐々に移行させねばならぬ事を痛感した。しか  
もミネナんな状態にするために、鈹塩を岩にはめこみ、  
自然になめられる様に留意し、水分も自然に湧き出る状  
態におくことである。夏は山の北斜面に移行させ常緑樹  
を植え込む必要がある。飼育舎の入口は二重トビラとし  
高さ2米を要し、下はこまかく上部はあらくし、発情期  
の眼の色、食物が変る事を留意すべく、飼育係を専門に  
2人常動させる様、諸事万端に細心の留意を払っていま  
す。かもしか捕獲の状況のフィルムは、NHK名古屋放  
送局に保管されているから、博物館大会その他の会合の  
際、借出されればいと存じます。ラジオ放送は4月23  
日(日曜日)7時15分から朝の訪門で御話し致しました  
から主旨その他を了解して頂けると存じます。

(三重県立博物館 学芸員)

# 娘の小屋番

—福島寿子氏—

舟窪小屋といっても知らない人もいる。後立山の山小屋としては比較的新しいものであることと余り宣伝されていないからである。

だが一度訪れたことのある人は、他にない山小屋の空気が忘れられず次の年も又訪れるという。

経営者は針ノ木峠小屋の百瀬美江氏について二番目の女性である。福島寿子氏である。

## 舟窪小屋建設

舟窪小屋が建設されたのは昭和29年7月で、建設者は寿子氏の父、宗市氏であった。

小屋の建設にあたり、山小屋の命ともいえるべき水場のあるところ、それを見つけるために草や木のはえ方でほぼ見当をつけては幾日も山中を歩きまわり、現在の位置にきめたそうである。又、当初建築材は現場でとることにした訳だが地形が悪いため一本一本背負い上げなければならなかったので建設に思ったより時間と労力がかかり出来上がったのが7月の末。

2間(3.6m)×3間半(5.8m)、2階建ての大きいとはいえないまでも、木の香も新しい山小屋ができたのである。だが葛温泉から小屋までの道が又大変であった。当時の七倉尾根の急坂は「俺はブナ立ち(鳥帽子岳への登りで日本三大登りの一つ)とことと、どっちをとるといったら、ブナ立ちをとるな」とある人に冗談を云われた位であった。

しかし36年度には大町市の観光課が昨年の鳥帽子岳一舟窪岳徒走路の手入れに引き続いて徹底的に整備することになっているというから、そんな冗談も昔の語り草になりそうだ。

## 父 遭 難 す

舟窪小屋ができた翌年、昭和30年2月16日、丁度寿子氏が高等学校を卒業する少し前である。宗市氏は友人2名と舟窪小屋に行くべく家を出て、再び帰らぬ人となった。

途中の七倉沢上部で表尽雪崩に襲われたのである。

父を失った30年の夏はとりあえず遠縁にあたる大町市北原町、平林佐吾平氏に依頼した。翌31年、父の跡をつぐべく、平林氏の指導のもとに山小屋の一年をすごした。

32年から独力で小屋を経営して現在に至っている。しかし高校を卒業してわずかばかりの女の手を負いかねる



舟窪小屋前の福島寿子氏

こともしばしばあったが、その都度山仲間の友人が力を貸した。

## 差 し 入 れ

小屋の付近には、幹の太いダケカバがたくさんある。下にはシラネアオイ、キヌガサソウ、稜線に出るとコマクサ、イワギキョウが目に入る「おーい、寿子氏(トシコシ)いたかい」「キャッホー」さかんにどなりながら登って来る友人を見ると急に喜くなるそうだ。なぜならば「差入れ」(彼女への土産)と手紙が彼等のリュックの中に取まっているからである。そして長い間の小屋生活で友人の手紙が一番楽しみだという。

友人が来るとつい話しがはずんでねるのが遅くなると翌朝、早立ちのお客さんに「ごはんまだですかー」「はやくしてくださいよー」といわれてあわててとび起きて柱に頭をぶつけたこともあるとか。

天気の良い時には、稜線に出かけて付近の山々を見まわ

しながら昼寝をすることが気に入ったらしくチヨイ、チヨイ出かけ昼寝を楽しんで来るとか、又、小屋の前のダケカバの木にザイルでハンモックを作って「こんなのはどこ山でもできない」「快適、快適」とさわぎながら昼寝したらカゼをひいたと、それは一緒にいる小屋番がそと教えてくれた。天幕組がたくさん来る時は頭痛のタネだという、小屋から100mほど下に水場があるのだが、そこが満員になってしまうからで、お客さんでもない時には少し位遅くなくてもかまわないのだが……と話してくれた

### アザミの天ぷら

小屋の前にはアザミがたくさんある。「どう、この味、この腕の良さかげん、量のたくさんあるあたり、気に入った?」舟窪小屋というところアザミの天ぷらという事になりそう。父宗市氏がいた頃にはワナを仕掛けてノウサギをとり、ウサギライス(ウサギの肉入りのカレーライス)を作ったものだが、私にはウサギをとるのが可愛想でと、アザミの天ぷらになったらしい、その他に山菜(さんさい)のおしたしも、独特の風味と珍らしさが登山者を喜ばせ評判が良いという。そして天ぷらや山菜のおかわりを出されるとつい喜ぶようになって自分達のみまで出してしまう。山菜料理は舟窪小屋の自慢料理といえよう。後立山を徒走して来た登山者はおよそ他の山小屋と違ったヒナビタ山小屋の空気が忘れられず「又来年も来ますが、アザミの天ぷらをたのみますよ」と帰って行くそうである登山者の数が少なく、静かであり、家族的なサービスが人の心をとらえるのかもしれない。

### ハイネの詩集

ある日老年組と若年組の2組が登って来た、老年組は夕飯をすますと早々に床に入ってしまったが、若年組は月の稜線へと出かけて行った、彼は横笛をもって、そして彼女はハイネの詩集を小脇に……黒い影を地に落して遠ざかって行った——月がいつもよりさえてきれいだったという寿子氏の目は当時を想い出しているようだった

又ある日、画架を背負った老画家がひよこりとして一人を訪れた、七倉の稜線が気に入ったと見えて、1時間位小屋で休んでは2時間位歩きまわる。そんなことを続けて1週間ほど滞在していたある日、不動沢で事故が起ったら予定を繰り上げてさっさと帰ってしまった「私のような老人がいたのでは、じゃまになるでしょう。来年も又来ますよ」と。「去年の夏山の思い出のひとつまで」とニコニコ笑いながら話した。

夏山シーズン中に小屋付近にサル群が2度ほど現わ



小屋前でお客さんと記念に一手前2人と左端小屋番

れた。ライチョウ、ホシガラスはたびたび見かけるのでさして珍らしくもないがサルが来たというので、皆んなで小屋をカラッポにして見に行った、遠くの方から「キャツ」「キャツ」と鳴きながら近ずいて来るので木の陰にかくれて「キャツ」「キャツ」とやっていたら「その辺で、サルが鳴いているぞ」とお客さんに間違えられて早々に小屋に逃げ帰ったこともあるという。

### 舟窪小屋に思う

今までお客の多い日でも1日に10人位、だから小屋の中がゴッタ返している様子は舟窪に関しては想像することができないという。

今よりも更に多くの人々に来てもらいたい、この山の特徴である、静かさ、山小屋の味をそこねる位は困る。といって現在のままでは経営が成り立たないから、余り一時に多勢来すぎて繁雑にならないように、そして、より多くの人々に静かな山を楽しんでもらいたい。そんな時がききつと来ると思いますがと結んでくれた。

(千葉彬司 山博学芸員補)

## イカル

長沢修介

田の畔も日増しに緑を加え南からの使者、燕もやって来て花便りもほつぽつ聞える頃になると、冬の間をこの平地で過した多くの鳥達も北へ向って去るもの、山村へ入って繁殖を始めるもの、それぞれ生れ故郷へと帰って行く。そんな或る晴れた朝、北に去る前の一刻を風雪と闘って半年を過したこの土地をも一度見ておこうと、見晴しの良いこの枝に集ってあれこれと思いを巡らしている一群のイカルに出合った。

古来、マヒワ、ホオジロ、などと同じく野鳥の中では比較的飼育されている鳥で良く知られている。食性は植物質が主で草木の実、樹木の若芽、豆類の様な穀物などを食べていて飼育しやすいこと、声量のある節廻しの面白い囀りをするためであろう。日本特有の鳥で、北海道や本州中北部で繁殖し、冬季は九州や四国に渡る。渡りの時は大群を作るが他の時は少群でいることが多く森林や低山に生活している。体は肥大していて長く飛ぶには重い感じがする位ずんぐりしている。くちばしは黄色で太く円錐形をしていて黒い斑点がありこの斑点は幼鳥に多く成鳥の年数を経たものなど少く黄色だけとなる。「キョッ」「キョッ」と地鳴きをして囀りは節廻し面白く「キ



一、コー、キー」「キキ、キーコ、キー」と特徴のある抑揚をつけて鳴く。これを「月、日、星」と聞き倣して別名三光鳥とも言われる。太いくちばしは丈夫で固い木の実などを割って食べるのにも良く特に豆などを与えるときくちばしにくわえて押えながら巧に舌でくるくと廻して皮を除き割って食べる。こんな所から「マメワリ」「マメマワシ」の別名で呼ぶ人もある。広葉樹林の枝上に枯枝、苔などを集めて皿形の巣を作り青緑色の地に褐色斑のある卵を3~4個産む。

## 資料寄贈

地質調査所月報NO11.10、地質調査所 金沢文庫NO 64 金沢文庫 山毛樺林NO57 広島山の会 登摩NO 254 東京緑山岳会 山NO343~345 横浜山岳会 OM CレポートNO136 奥多摩山岳会 日本アルプスの植物 長野県小諸市川辺地区における高等植物目録(予報) 横内斉 野鳥が巣箱を利用するようすの観察記録 国立自然教育園 Nature Study VOL III NO3 大阪市立自然科学博物館 会報61.1 61.3 京都山岳会 山と溪谷NO266 山と溪谷社 ハイカーNO66 山と溪谷社 まどのゆき 積雪科学館 金沢文庫研究NO65 金沢文庫PAPYRIFERA VOL6 長野西高生物班 植物趣味 東亜植物学会 地質調査所月報NO11~12 11~11 地質調査所 地質ニュースNO78.79 地質調査所 四ツばし 大阪市電気科学館 モンキーNO40 日本モンキーセンター 私たちの自然NO3 日本鳥類保護連盟 大多摩 観光情報NO14 大多摩観光連盟 Nature Study NO 614 大阪市立自然科学博物館 玲峰NO;7 玲峰グループ 東斐月報NO33.34東斐山岳会 京都山岳61~4月号

京都山岳会 会報61 1~2 登歩溪流会 RGAC NO28.29 そびえる仲間山岳会 (敬称略)

## 研究報告第1号出版

博物館では1956年度、市内の居谷里湿原の総合調査を行ったが、このほどその調査担当者によって報告がまとめられたので、それを一括して「大町山岳博物館研究報告」第一号として出版した。今回は自然科学部門だけを内容にもり込んだもので他部門については近く続刊される予定である。

内容は動物性プランクトン、水棲昆虫、昆虫、両棲類相、鳥類、哺乳類ファウナ、小動物相、藻類相、ケイ藻植生木材腐朽菌類群相、高等植物となっている。

タイプ印刷で表紙及び写真一頁活版、B5版、紙質80斤使用、170頁、限定出版で150部、希望者には実費250円で頒布しているので、博物館宛申込みたい。

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第6巻第5号 1961年4月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場